

3か月に渡ってお届けしてきました「コミュニケーションの自己点検」ですが、今回でとうとう最終章となりました！長かった・・・ほんとに長かったです・・・皆さん、もう一度「第13回シリーズ」を始めから読み返してみて下さい。新たにまた気付く事があるかもしれませんよ(^-^)さて、また来月から3ヶ月間休憩していただいた坂井先生に原稿の催促をしないといけませんねえ～・・・こんなにたくさんの方々が心待ちにしていると、坂井先生もまた書いてくれるでしょう！・・・ねっ！♪坂井先生♪久田

第13回 『わかるように伝えていきますか』

香川大学 坂井 聰

コミュニケーションの自己点検

(キ) チェック7 対象となる人が周囲に受け入れられないような行動をしたとき、その行動がどのような意味をもっているのかを考えてみたか

障がいのある人のなかには、周囲の人に受け入れられないような行動をとる人がいます。これらの行動には理由があり、多くの場合、それは「要求」、「注目」「拒否」であると考えられています。なかには感覚的な問題が、そのような行動を示す場合もあります。

この場合は、コミュニケーション行動とは考えることができないのですが、先の「要求」、「注目」、「拒否」はコミュニケーション行動と考えることができます。どのような場面で、どのようなときに起きたのかがわかれれば、その行動が果たしている意味を知ることができます。ただ、「いけない」というように、行動を止めるだけではなく、その行動の果している役割を知ることが大切だということなのです。

(ク) チェック8 対象となる人の周囲に受け入れられないような行動がコミュニケーションのきっかけにならないかと考えてみたか

周囲の人たちに受け入れられないような行動の果たしている役割がわかると、その行動は、コミュニケーションのきっかけになる可能性があります。表現方法が未熟なために、そのような行動で表現するしか方法がないというように考えることができるからです。

つまり、「このような方法では伝わらないよ。だから、このような方法で伝えたらいいんじゃないの」という提案をすることができるようになるということなのです。新しいスキルをその場で教えていく場合に重要なことは、その新しいスキルによって、その人が求めていることが確実に実現するようにしておくことです。援助を求めるためのスキルを教えるのであれば、援助を求めてきたときには、それに即座に答えることができるようにしておかなければなりません。また、新しいスキルを教えるときには、そのスキルが、今まで問題となっていた周囲の人たちに受け入れられない行動よりも、簡単に結果が得られるようにしておかなければなりません。なぜならば、新しいスキルが、手続きの複雑なものであったとしたら、問題となっていた行動で表現する方が簡単になってしまうからです。

(ケ) チェック9 対象となる人との間で共通の話題をもっているか

コミュニケーションするときには共通の話題が必要になります。共通の話題があるからそこにコミュニケーションが成立するのです。お互いが理解できない話題であると、そこでやりとりをすることはできないでしょう。また、一方的な話題では、楽しくないので、その場から離れてしまうこともあるのではないでしょうか。対象となる人がコミュニケーションの場に参加することができるような話題でやりとりを練習することが大切なのです。コミュニケーションが苦手な人が、何とかやりとりを続けたいと思うような話題を持っておくことが大切なのです。

(コ) チェック10 対象となる人がやりとりしたくなるような場面を作ったか

対象となる人がコミュニケーションしたくなるような場面を作ることもとても大切です。コミュニケーションの機会を作っても、それが楽しくない場面があったら、それを何回も経験することは苦痛かもしれません。しかし、コミュニケーションすることの楽しさや便利さ、面白さに気がついてもらうためには、その人がやりとりしたくなるような場面を作っていく必要があるということなのです。

コミュニケーションしたら何かが変わる。課題が解決する。望んだものが手に入る。このような経験をとおして、コミュニケーションの力が育っていくからです。

(サ) チェック11 選択できる場面を作ったか

コミュニケーションをとることが困難な子どもの場合でも、選択の場面を作ることができれば、コミュニケーションの機会を簡単に作ることができます。「どちらにするのか」、「どの場所がよいか」など、選択しても差し支えのない場合は、選ぶという経験をすることができるよう、そのような場を設けてみることが大切です。選択することをとおしてコミュニケーションの便利さや楽しさに気がつく人もいるのではないかでしょうか。

障がいがある人の場合、周囲の人に身の回りのことを含め用意されることが多くなるために、選択する機会が少ない場合があります。また、ADL（日常生活動作）に指導の重点が置かれていると、どうしても、訓練的な内容に主眼が置かれるため選択などの機会も少なくなってしまう可能性があります。しかし、いろいろな場面で選択することができるような場を作ることができれば、多くの回数を練習することができるはずです。そして、伝わったことが経験できたり満足感を味わったりすることにつながります。選択することができるようにすることで、コミュニケーションすることの大さに気がつくようにしていくのです。

11項目にわたってチェックをしてきましたが。これらをチェックするということは、自らのコミュニケーションの姿勢を振り返るということなのです。たまには、自分の関わりを振り返りながら、どうやったら楽しくコミュニケーションすることができるのかを考えてみてもらいたいと思います。

参考文献

中邑賢龍 AAC入門 こころリソース出版会 1998、 坂井聰 コミュニケーションのための10のアイデア エンパワメント研究所 2004
坂井聰 クラスルームコミュニケーション こころリソース出版会 1998